

『智恵子抄』における「サンタマリア」考 A Study of “Santa Maria” in *Chiekoshou*

大島 龍彦

Tatsuhiko OSHIMA

1

明治四十五年七月二十五日に作詩され、同年九月一日発行の『劇と詩』第三卷第九号に発表された「N——女史に」は、大正三年十月、第一詩集『道程』への掲載に際し、題名を「——に」に変え、内容も大きく改められた。そして、昭和十六年八月、『智恵子抄』刊行の時、題名を「人に」に変更し、再録された（引用詩行頭の数字は、私的に施したものである）。

人に

- 1 いやなんです
- 2 あなたのいつてしまふのが
- 3 花よりさきに実のなるやうな
- 4 種子よりさきに芽の出るやうな

- 5 夏から春のすぐ来るやうな
- 6 そんな理屈に合はない不自然を
- 7 どうかしないでゐて下さい
- 8 型のやうな旦那さまと
- 9 まるい字を書くそのあなたと

- 10 かう考へてさへなぜか私は泣かれます
- 11 小鳥のやうに臆病で
- 12 大風のやうにわがままな
- 13 あなたがお嫁にゆくなんて
- 14 いやなんです
- 15 あなたのいつてしまふのが
- 16 なぜさうたやすく
- 17 さあ何といひませう——まあ言はば
- 18 その身を売る気になれるんでせう
- 19 あなたはその身を売るんです
- 20 一人の世界から
- 21 万人の世界へ
- 22 そして男に負けて
- 23 無意味に負けて
- 24 ああ何といふ醜悪事でせう
- 25 まるでさう

- 26 チシアンの画いた絵が
- 27 鶴巻町へ買ひ物に出るのです
- 28 私は淋しい かなしい
- 29 何といふ気はないけれど
- 30 ちやうどあなたの下すつた
- 31 あのグロキシニアの
- 32 大きな花の腐つてゆくのを見る様な
- 33 私を棄てて腐つてゆくのを見る様な
- 34 浪の砕けるあの悲しい自棄のころ
- 35 はかない 淋しい焼けつく様な
- 36 それでも恋とはちがひます
- 37 サンタマリア
- 38 ちがひます ちがひます
- 39 何がどうとはもとより知らねど
- 40 いやなんです
- 41 あなたのいつてしまふのが
- 42 おまけにお嫁にゆくなんて
- 43 よその男のころのままになるなんて

詩「人に」の、2「あなたのいつてしまふのが」1「いやなんです」13「あなたがお嫁にゆくなんて」14「いやなんです」という主張（テーマ）は、あまりにも分かり易い。が、しかし、それを読んだ「あなた」である智恵子の心境は複雑だったのではないだろうか？ 進行していた郷里の医師寺田三郎との婚姻話に絡む実家との確執による複雑さは、一応考慮

の範疇であるが、当時（明治四十五年六月から八月）高村光太郎に好意を寄せていたであろう智恵子にとって、その婚姻話を否定する高村の発言は嬉しい反面、その解釈には少なからず戸惑いを感じたに違いない。

8「型のやうな旦那さまと」9「まるい字を書くそのあなたと」10「かう考へてさへなぜか私は泣かれます」といい、「あなたがお嫁にゆく」ことは「醜悪事」だとまでいう高村と、28「私は淋しい、かなしい」29「何といふ気はないけれど」という高村。そして「淋しい」ことはないといながら、35「はかない、淋しい、焼けつく様な」気持ちだという高村。それはまた「恋とはちが」うという高村の心の有りどころをどのように解釈するべきか、智恵子の心境は複雑だったに違いない。ただ、明治四十五年に智恵子が実際に読んだ詩は、「N——女史に」である。ただし、改訂されてはいるものの、その主張に違いはない。

ところで、智恵子の複雑な心境はともかく、この分かり易い主張の詩の中にも幾つか解釈にとまどうセンテンスがある。例えば、20「一人の世界から」21「万人の世界へ」とはどういう事か？⁽¹⁾ 26「チシアンチシアンの画いた絵が」⁽²⁾ 27「鶴巻町へ買物に出る」⁽³⁾ のが何故「醜悪事」なのか？ そもそも「チシアンチシアンの画いた絵」とはどの絵を指しているのか？ など理解に苦しむ。

本稿ではその理解に苦しむセンテンスの中でも、特に主張の起因に関わる、37「サンタマリア」の解釈について思考してみたい。今その前後も含めて再録すると次のようである。

- 34 浪の碎けるあの悲しい自棄のころ
- 35 はかない 淋しい 焼けつく様な
- 36 —— それでも恋とはちがひます
- 37 サンタマリア
- 38 ちがひます ちがひます
- 39 何がどうとはもとより知らねど

智恵子がよその男の所にお嫁に行くのはいやだ。それは理屈に合わない不自然なことだ。旦那とあなた、そう考えると泣けてくる。醜悪事だ。「はかない 淋しい 焼けつく様な」という高村の心は、智恵子への恋心に違いないと思うのだが、高村は恋とは違うという。そして「サンタマリア」でもないという。普通「サンタマリア」とはイエスの母の尊称で、「聖母マリア」のことと解される。構成上「恋」に相對するものが「サンタマリア」では違和感を感じる。大あわてで智恵子の嫁入りを阻止しようとする、「あわてぶり」を小主題とすれば、意味が曖昧なのは作品的には39行目に、「何がどうとはもとより知らねど」とあるから問題はない。が、敢えて「サンタマリア」を高村の心の深層に探ることによって、高村が智恵子を当時どのように捉えていたのか把握し、更に作品的に如何に解釈すべきか思考してみたい。

なお、使用テキストは次のようである。詩「人に」は、龍星閣刊行の『智恵子抄』（昭和十六年八月）を用い、詩「N——女史に」以下、文献等は北川太一監修の『高村光太郎全集』を用いた。

2

ところで、改訂前の「N——女史に」（明治四十五年七月二十五日作）の該当部分は次のようである。

それでも恋とはちがひます

——そんな怖いものぢやない——

サンタマリア！

あの恐ろしい悪魔から私をお護りください

ちがひます、ちがひます

何がどうとはもとより知らねど

詩「N——女史に」の中では、「恋」を「怖いもの」「恐ろしい悪魔」と捉え、高村は聖母マリアに救いを求めている。普通キリスト教の重要な教義である、父と子と聖霊の三位一体から母性は除外されるが、キリストを信じる人々は、

聖母マリアの中に神性を感じ、ことあるごとに祈りを捧げている。⁽⁴⁾そして、聖書の中の神は、しばしば、「あなたがたは乳を飲み腰に負われ、ひざの上であやされる。母のその子を慰めるように、わたしもあなたがたを慰める」⁽⁵⁾と、母のイメージで語られる。十三世紀、イタリアの神学者ボナベントゥーラが描いた『キリストの生涯に関する黙示録』には、母性溢れるマリアの姿が温かい筆致で描かれ、十四、十五世紀には広くヨーロッパに知られたという。⁽⁶⁾そもそもマリアはエバ（アダムとイブのイブ）の犯した罪をあがなうためにキリストの母となるべく神の召命を受けた女性である。神の計画では、女性は初めから人類救済という修復作業に組み込まれていた。高村にとってのエバ、マリアが智恵子であったか。

昭和二年一月六日作の詩「あなたはだんだんきれいになる」の中で、高村は「あなたが黙つて立つてみると／まことに神の造りしものだ。」という。昭和二十四年十月作の詩に「あの頃」がある。詩中に「人を信ずることは人を救ふ。」「わたくしの猛獣性をさへ物ともしない／この天の族なる一女性の不可思議力に／無頼のわたくしは初めて自己の位置を知つた。」とある。あの頃というのは、広義には智恵子がグロキシニアの鉢植えを持つて高村のアトリエに訪問した明治四十五年の六月頃から、結婚披露をした大正三年の十二月頃をいうのであろう。「智恵子の半生」⁽⁷⁾に、「私が知つてからの彼女は実に単純真摯な性格で、心に何か天上的なものをいつでも湛えて居り、愛と信頼とに全身を投げ出していたような女性であつた」とある。高村は大正元年十一月二十五日作の詩「郊外の人に」の中で、「君こそは実にこよなき審判官なれ／汚れ果てたる我がかすかずの姿の中に／をさな兒のまこともて／君はたふとき吾がわれをこそ見出でつれ」といい、また、既記の詩「あの頃」と同時期に作られた詩「元素智恵子」の中で、「智恵子はこよなき審判官であり、／うちに智恵子の睡る時わたくしは過ち、／耳に智恵子の声をきく時わたくしは正しい。」という。昭和二十二年七月に『展望』に発表した「暗愚小傳」の中の詩「デカダン」に、「遅まきの青春がやつてきて／私はますます深みに落ちる。／意識しながらずり落ちる。／カトリックに縁があつたら／きつとクルスにすがつてあたらう。／クルスの代りにこのやくざ者の眼の前に／奇蹟のやうに現れたのが智恵子であつた。」とある。キリストがしばしば母のイメージで語られていることは、時に母なるものがキリストと重なるということでもある。聖書の中の神は王であり、統治者であり、裁判官である。詩「メトロポオル」（昭和二十四年十月作）の中に、「智恵子は死んでよみがへり、／わたくしの肉に宿つ

てここに生き、／かくの如き山川草木にまみれてよろこぶ。」とある。これらの作品中における智恵子は正にキリストであり、聖母マリアである。詩「冬の朝のめざめ」（大正元年十一月三十日作）の中で、「基督に洗礼を施すヨハネの心」を「我はわがころの中に求めむとす」と、智恵子をキリストに重ね、待ちわびたものの到来を喜ぶ。

詩「N——女史に」が書かれた前年明治四十四年三月作の詩に「祈祷」というのがあ

祈祷

童貞なるマリア。

いと憐れみ深き、基督の母なるマリア。

基督を信ぜずして、基督の聖教に涙を垂るいと卑しき者、

まして爾聖母の奇蹟を心より信じ能はぬいと貧しき者、

斯かる者も尚ほ爾の膝下に身を投げかけ、

爾の衣の裾に接吻せむとする事多し。

願はくは、この時、「異教徒よ、去れ、」と辱め宣ふ事なかれ。

異教徒よ、と呼ばるる聲の如何に堪へがたく苦しうして又止みがたき事よ。

すべてを恵むみころを以て、事を糺し給ふ事なく唯憐みをかけ給へ。

内界の母、靈魂の故郷を思ふ事切なるものを。

願はくはあたたかに我を包み給へ。

安らかに我をして爾の懐に泣かしめ給へ。

「あたたかに我を包み」「爾の懐に泣かしめ給へ」と求める高村の姿は、詩「N——女史に」で救いを求める高村の姿に重なる。詩「N——女史に」の「サンタマリア」は、「いと憐れみ深き、基督の母なるマリア」そのものと言える。

ところが、大正三年十月、第一詩集『道程』への収録の際、高村は「N——女史に」から「そんな怖いものぢやない」と「あの恐ろしい悪魔から私をお護りください」を削除してしまったのである。

削除することによって作品はどうなるのか。削除した意味は何だったのか。高村は智恵子への想いを「恋」とは違うといい、「サンタマリア」でもないという。既記の通り普通「サンタマリア」とはイエスの母の尊称で、「聖母マリア」のことと解され、詩「N——女史に」の「サンタマリア」は、「聖母マリア」としての意味であった。構成上「恋」に相對するものがキリストの母マリアでは違和感を感じるのである。

大正十四年七月三十一日発行の『アルス大美術講座』第三巻に、高村は「彫塑総論」を書いた。その中で、ミケランジェロが真の彫刻家であったと主張して次のようにいう。

彼の彫刻の中でも最も彫刻的な、メチチ家の菩提所にある「聖母子」の大理石像であります。私は此程人に迫つて来る彫刻を多く知りません。何といふ気高い、質素な、端麗な、さうしてやさしい愛に満ちた、内の力と美とに恵まれた彫刻であります。

(中略) 此の「聖母子」は斯かる考察から見ても亦最も叡智に満ちたものであります。その直線に近い一側面の何といふ、高潔な事でありませう。その斜めにうつむいた首の何といふ美の深さでせう。さうして此の静かさ。此の安らかさ。此の清浄さ。

高村は生涯にわたって首を二十程作っている。^⑧ その内、女性の首は三つある。一つは年代もモデルも不詳のもであり、他の二つは智恵子の首である。高村は大正五年頃、智恵子の「斜めにうつむいた首」(石膏彩色)を作り、また、昭和二年にも智恵子の首(石膏塑像)を作っている。

高村は智恵子を、「をさな児のまことこそ君のすべてなれ／あまり清く透きとほりたれば」(詩「郊外の人に」と描き、既記詩「あの頃」の中でその純粹さを詠い、「その清浄な甘い香り」が高村を包み、そうして「この天の族なる一女性の不可思議力に／無頼のわたくしは初めて自己の位置を知った。」という。ミケランジェロの彫刻「聖母子」評と智恵子の存在が重なる。

「彫塑総論」を書いた前年、高村は大正十三年三月一日発行の『婦人之友』に、「母性のふところ」と題して次のようにいう。

この一二年、私は殊にこの事を身にしみて感ずるやうになつた。天空と、母の愛とを思ふたびに、私の心は「無限」に触れる。母の愛はまつたく神の愛であらう。子育て観音、あのマリアに感ずる愛と恵との深さが此なのであらう。私は母の愛を思ふたびに此の世に何が無くとも此があればといふ氣がする。(中略)だが母の愛を思ふと、更に母性の愛をおもふ。母性の愛は女性の持つ最も意味深い、最も貴い、又最も力のある本能である。この本能はあらゆる女性にある。子を持つ母親には固より、子無き妻女にも、処女にも、女の子にもある。この母性の愛が男性の此の世に於ける最も温かい、最も安らかな隠れ家である。私の女性礼賛も、もともと此の母への絶対信頼が根にあるのである。男性はつねに母性の愛をもとめてゐる。又常にそれに救はれてゐる。

この後も母性の愛の礼賛が続き、「夫婦の愛が健全に進めば、夫は必ず妻の内に潜む母性の愛にひたされるに至るであらう。この場合夫であつても男性は子であり、妻であつても女性は母である」という。高村光太郎、結婚十年目の発言である。高村はまた昭和四年十月二十日発行の『大思想エンサイクロペディアリ文芸思想』の「ウォルト ホキットマン」の中で、「女性⇨母性⇨聖母マリア的汎愛」と指摘する。大正三年、詩「N——女史に」を改訂した時の「サンタマリア」は、どうも高村の母わかにつながる「母性愛」を指したもののようだ。高村の母わか(六十九歳)したのは、大正十四年九月十日の事である。大正三年、高村は「恋」でも「母性愛」でも無いものを智恵子に感じていたと言えそうである。

4

明治四十五年七月二十五日作の詩「N——女史に」における「サンタマリア」は、マリア信仰ともいふべきものであり、大正三年改訂後の「サンタマリア」は、「母性愛」を指すと考えられた。大正三年の改訂に際し、38「ちがひますちがひます」と37「サンタマリア」を否定したのは、聖母マリアに混沌とした思いを救済してもらいたい反面、救済が結果するものをおそれたとも考えられるが、高村の母わか(イメー)と重なる「母性愛」を否定したものとも解釈できた。それが明確に言えるのは大正十三年発表の「母性のふところ」以後、つまり昭和十六年の詩「人に」である。

『智恵子抄』入抄の詩は、一気呵成に書かれたものではない。明治の終わりから昭和の大戦以前までに作られたものである。従って作品中における高村の智恵子の捉え方も変化している。もちろん『智恵子抄』に描かれている智恵子像は智恵子の一面であることは周知のことである。草野心平編『高村光太郎と智恵子』には、「いやな面はかくしたんです。だけどあれ書いた頃はそうするのが作品だと思ってたな」⁽⁹⁾とある。

『智恵子抄』冒頭の詩「人に」で、「恋」でも「母性愛」でもないものを感じた高村は、次詩「或る夜のころ」で「断ちがたく、苦しく、のがれまほしく／又あまく、去りがたく、堪へがたく——」という熱病のような感情からの覚醒を求め、続く詩「おそれ」で「私の心の静寂は血で買った宝である」と自己肯定し、智恵子にその静寂の価値を訴え、その一点に触れる場合の覚悟と、触れた場合に起こる波動の衝撃に堪えられる力を作れと要求する。そしてその力は、次の詩「或る宵」の中で、「最善の力は自分等を信ずる所のみにある」とし、「我等は為すべき事を為し／進むべき道を進み」、「我等はただ愛する心を味わへばいい」という。愛の萌芽期である。高村は詩「人に」の中で、「恋」でも「母性愛」でも無い「愛」を既に感じ取っていたようである。

因みに「愛」⁽¹⁰⁾とは、自分の存在価値を認識し、更に成長したいという意欲にその源があり、そして、相手の存在そのものに価値を感じ、感謝するところに動機がある。「愛」の実行には相手を愛するという明確な決断、覚悟が必要であり、そして永続的な意志が欠かせない。従って本当に愛し合うもの同士にとって「死」は一つの通過点であり、死が「愛し合う二人を分かつ」ことはない。「愛」とは、いつまでも相手の幸福を願い、相手の成長を支援する決断、意志に支えられた行為であり、「恋」のような単なる感情ではないのである。

とまれ、次詩「郊外の人に」と、続く詩「冬の朝のめざめ」の中で、高村は「愛人よ」と高らかに叫ぶ。翌大正二年三月十五日作の詩「人類の泉」の中で、自らの本質が新生し、成長する速度が増してゆく「魂の加速度」を感じ、「自然と涙が流れ／抱きしめる様にあなたを想ひつめてみました／あなたは本当に私の半身です」という。そして「私にはあなたがある」とその存在そのものを手放しで喜ぶ。やがて、「半身」だった智恵子は「僕のいのちとあなたのいのちとが／よれ合ひ もつれ合ひ とけ合ひ／混沌としたはじめにかへる」(大正二年十二月九日作「僕等」)のである。更に「僕等は高く どこまでも高く僕等を押し上げてゆかないではられない」と、互いの成長を切望する。愛の成長期

である。結婚十五年目に入っても高村の愛が枯渇することは無かった。「あなたが黙つて立つてゐると/まことに神の造りしものだ。/時々内心おどろくほど/あなたはだんだんきれいになる。」(詩「あなたはだんだんきれいになる」昭和二年一月六日作)。智恵子四十二歳のことである。

その後智恵子の狂気が発覚すると、高村は「足もとから鳥がたつ/自分の妻が狂気する」(詩「人生遠視」昭和十年一月二十二日作)と、戸惑いながら智恵子を詠う。この時、高村は詩の中で初めて智恵子を妻と呼んだ。進行する脳の障害がひどくなると、「食事も入浴も嬰兒のように」(「智恵子の半生」)高村がしたという。

療養のための「転地先の九十九里浜で完全な狂人になつてしまつた」⁽¹¹⁾ 智恵子を、高村は「一週一度汽車で訪ねた」(「智恵子の半生」)。今ほど交通の便が良くないときである。

午前に両国駅を出ると、いつも午後二時頃此の砂丘につく。私は一週間分の葉や、菓子や、妻の好きな果物を出す。妻は熱つばいやうな息をして私を喜び迎へる。私は妻を誘つていつも砂丘づたひに防風林の中をまづ歩く。そして小松のまばらな高みの砂へ腰をおろして二人で休む。⁽¹²⁾

智恵子を九十九里に預けた帰りの様子を、高村は友人水野葉舟に次のように語つた。「一昨日送つて来ました。小生の三年間に互る看護も力無いものでした。鳥の啼くまねや唄をうたふまねをしてゐるちゑ子を後に残して帰つて来る時は流石の小生も涙をながした」(昭和九年五月九日付け手紙)。「三年間に互る看護も力無いものでした」と悔恨する高村は同日智恵子の母センに、「長い間ちゑ子を中心に生活してゐたため、今ちゑ子の居ない此の家に居るとまるで空家に居る様な気がします。病気のちゑ子がふびんでなりません」と書き、更に「毎日軽い運動、散歩」云々、「生水をのませない様に御注意下さい。どうしても一度沸騰した湯冷ましをやつて下さい」と細々とした指示を書き送っている。

精神の病いに、簡単な手工が良いと聞けば、智恵子の平常好きだった千代紙を持参し、また、折り紙から飛躍的に進歩した芸術作品である紙細工に驚嘆した高村は、求めに応じて色紙を用意し、智恵子の仕事が始まつた。そして、高村は「千数百枚に及ぶ此等の切抜絵はすべて智恵子の詩であり、抒情であり、機智であり、生活記録であり、此世への愛の表明である。此を私に見せる時の智恵子の恥はにかしかしかそうなうれしそうな顔が忘れられない」(「智恵子の切抜絵」という。「私がそれを見ている間、彼女は如何にも幸福そうに微笑したり、お辞儀したりしていた。最後の日其を一まとめに自

分で整理して置いたものを私に渡して、荒い呼吸の中でかすかに笑ふ表情をした。すっかり安心した顔であった。私の持参したレモンの香りで洗われた彼女はそれから数時間のうちに極めて静かに此の世を去った。昭和十三年十月五日の夜であった」（智恵子の半生）。智恵子の最期を看取った斎藤徳次郎医師は、その時の様子を次のように伝えている。¹³

夕方から脈が次第に細くなり、呼吸が乱れ勝ちになりますと、光太郎氏はもうお注射はおやめ下さいと力をこめておつしやいました。そつとおかされたかつたのでしよう。しばらく眼をとじられて瞑想されたと思います。それからしばらくのちに「昔山巔でしたやうな深呼吸」を一つされました。それと同時に黒の和服に袴をつけた光太郎氏の巨大な身体が大きくゆれだしました。私は思わず外にとび出して、静かにご冥福を念じ上げました。このよう

に荘厳な、力に溢れた臨終を、私は今日まで知りません。恐らく一生涯経験出来ないと存じます。弟の豊周に「智恵子が死んだんだあと始末をしたいから一寸来てくれ」と高村から電話があったのは午後の十一時過ぎだった。¹⁴ 智恵子が亡くなったのは午後九時二十分。高村の「巨大な身体」の大きな揺れがおさまるまでに時間がかかったのであろう。

「一度死亡室に入れると始末が面倒になるので、まだ死なないことにして」高村は、「智恵子を抱いて、そつとアトリエまで連れ帰った」。高村の「外見はむしろ冷静で、取乱したところはまったくなかった」。高村は「智恵子を抱いてアトリエに入り、長椅子にねかした時、『あれだけ帰りがついていた家に、いよいよ帰ってきたけれど、死んじゃって。』とポツンと言った」¹⁵ という。

智恵子は死んだ。が、高村にとつて智恵子の「死」はひとつの通過点であり、死が「愛し合う二人を分かつ」ことはなかった。そうして、死んで復活した時、智恵子は高村の「うら若い母」となった。

亡き人に

雀はあなたのやうに夜明けにおきて窓を叩く

枕頭のグロキシニヤはあなたのやうに黙つて咲く

朝風は人のやうに私の五体をめざまし
あなたの香りは午前五時の寝部屋に涼しい

私は白いシイツをはねて腕をのばし

夏の朝日にあなたのほほ笑みを迎へる

今日が何であるかをあなたはささやく
權威あるもののやうにあなたは立つ

私はあなたの子供となり

あなたは私のうら若い母となる

あなたはまだある其処にある

あなたは萬物となつて私に満ちる

私はあなたの愛に値しないと思ふけれど

あなたの愛は一切を無視して私をつつむ

昭和十四年七月十六日作の詩である。『智恵子抄』における智恵子は、サンタマリアと関連づけて語られる。出会いのほのぼのとした好意がやがて恋心に変わり、熱病のような時を過ごした二人はやがて結ばれ、互いを思いやりながら仕事に励む。突然の妻の狂気に戸惑いながら懸命に妻を詠い、そして死を乗り越えた高村は、やがて「妻」である智恵子の「内に潜む母性の愛にひたされるに至る」¹⁰⁶ だったのである。

(1) 注

- 吉田精一監修『近代詩集の探求』（文学史の会）は、次のように解説している。
- 「二人の世界から／万人の世界へ」は、光太郎独自の発想で、『白樺』派とも異なる点が注目される。『白樺』派ならばむしろ「一人の世界から／万人の世界へ」向かうことを理想とするのであるが光太郎はこの言葉を、個性の世界から習俗の世界へとというような意味に用いているのである。光太郎にとって女性の結婚は、個性を喪失して習俗の中に墜ちることであり、無意味に男に負ける醜悪事であった。
- 大正元年八月十日発行の『美術新報』第十二巻第十号に光太郎は詩「エネチアの旅人」を発表した。同書にチシヤンのサンタ・マリア傳中の一節と「天上の愛と地上の愛と」が掲載されている。
- 詩「N——女史に」には、「鶴巻町に買喰ひに出るのです」とある。
- 石井美樹子著『聖母マリアの謎』（白水社）による。
- 日本聖書協会発行『イザヤ書』（66・12―13）による。
- 4と同じ。
- (6) 高村光太郎著『智恵子抄』（龍星閣）による。
- (7) 穴沢一夫・北川太一・中山公男・三木多聞責任編集『高村光太郎彫刻前全作品』（六耀社）による。
- (8) 狂気を背景にした発言ではあるが、光太郎との日常全てに言い得ることと思う。
- (9) 飯田史彦著『愛の論理』（ちくま）による。
- (10) 昭和十五年五月一日発行「知性」所収「自作肖像漫談」による。
- (11) 昭和十六年七月一日発行「新若人」所収「九十九里の初夏」による。
- (12) 昭和三十四年四月二十五日発行「高村光太郎と智恵子」（筑摩書房）所収「高村智恵子さんの思い出」による。
- (13) 高村豊周著『定本光太郎回想』（有信堂）による。
- (14) 14と同じ。
- (15) 大正十三年三月一日発行『婦人之友』（婦人之友社）所収「母性のふところ」による。
- (16)